藤の首途　地

へ 5
1139
66

讃岐

こゝ月もまるかりし讃岐の名楽にわたりて
芦ノ舟亭と云ねる人我門にゑ葉語
かとものさゝやきは地に暗廻していあるし
ちかかるかくしとゝ河の内へ新もよ
花ひらきおきしよ

丸はきる秋もゆーしこきむし

旅錦の名北ほれてみわね松蒸松濤の
かくかりあるして吉野をと尋てこ行るら

游戲三昧院

へ5
1139
66

66

ちとくに此寺の名産なれハこそ名も
そのかたにかはりしくて
瓜のあやに寄浪おもへとや霄の富

丸亀賦

享保庚戌の夏讃州に渉游して一日人々に
いざなはれ浜の松原に席を設く此亀の
致景たとへるにものなし城郭とかや人家は茶屋を
まじへ市廓まちまちに連なりて並ひ立ち
あさひの御とりゐにあたる港の浦に浮くさ
あまた山のこなたも寄りし海ちかき七浦の
浜にいつれ山をのぞみの伴に五ヶ浜に棲界と
いふ名のかたちむかしより書きつたへてなる細ほそか
そしれぬさは牛ヶ浜といふ名のみくさぎに
積くりて壺一株の松を添ひよせてこれを
仙翁の雛ね寿といふべし泊り住せらるる
かきり御の神もことく本宮の鳳凰も
いとかうかしんしまのあしこたる摺座あり
平の山は大師の跡とゝひれの中に
振り川小舟を浜の松山に栄振のむらしと
ちかふ重り浦のかくさまをてその君の
御前名とかう成風の浦の然鶯ハちかひ

舟まちとあるはむさゝびこゑおなじ小蔭く
啼くかはるかれはいとあはれにて烟の浴かは
かしこはきえゆくを短く筆握み
うれしき墓の名をしるして奉るを
おもひいでよ旅の心もあはれなりしに
残るの露の秋ことわり汀の嶋など星に
うつし蓮葉の山の夕涼も今こそ浦の
詠なりけらし

遠近にふくはいる鳴甚きし玩

此時は俳表氏筆芸士のもとに来て
此所の記を書ぬ

短歌行

若葉より吹くる風を清みけり　芦舟
柳に風と緑田葉より　アキ
坂道の塩を運ぶに送へて　承応
仮借を摘まんの蜀ち　貞水
一際けぶる深川に名の月　只
雁鳴くよ小島の屋へ佗て　舟

跡とりもなく寺子のうけ宗け　衣

鶏は啼く隠日の宮　む

大もつて小宅は雪の宵まとひ　舟

白足袋をはく根深盗人　紅

下戸庭に来してもの酔仲る　む

落の雪霧と山に紛れ　衣

二

手つ花婦寝て見る読ふある詩　紅

詩と客貧の此代も素栗　舟

石苗(サナ)畑りの根ひはあをふ一生不　衣

娘も手織に赤ひ襷裏　む

子安くておに唐(カラ)洲(ス)つけて物言う　舟

須の戸か比も分の眺ひ　石

笹の葉に見るもきつて白月お　む

此場く行ひより雨ゝ奥の伽　水

ウ

猿翁の住よ殿此場ありて　石

八雪次第なれく順き留　舟

むかし咄語こしらへの翁脚ま　々
露まとふの夜に山吹　む

名録

名の月に篝かゝれ日や雪のむ　蓼花
松ヶ枝や吹たてゝまく蓮園　枚濃
傘に菊をとこむ吉くれる　篁乃
冬籠ちよさあてゝ字むて哉　丹祇

風音も雲のこして汐テ家　信　虎雲
口笛に湖る鴨や屋かたし　柳泉
掃ち緒れこちよひかる露ちなし　芙蓉

三五月の末取出邑の何某汀位亭を尋ね途中の吹なりしひさう
サ年の人と旅して
箱ろみ山様下見ありし田の見とく

何某宗匠のゆしの門にありて俳諧
正伝の俳諧を論しけるに發句とより
前句附和風とは一字千金のたとへなる
作もうし宗匠門の筆しめはあらく
流るの韻なれはなりとうはこれ心を
とらへ行してかりそめに俳門の矯に於て
深きを究めして情の跡なるを旨とへし
おもしろき俳諧のかゝりて遠からしきは
風雅の邪なれはとて戯に鄙の詞を作りて
洞諫とするなかし

花と夕顔の宿よりまれは

寶らて鄙の筵の名にこられけむ
佐は麻姿のちりしくなりぬ
耳にきゆしき枯に動きぬ

短歌行

ゆるゝとの音にふる声の文反古　湖醉
年深き家の鳥の音　墨和
云ふなりや古の加減の菜は甚く　汀仙
行体見てすあれこし云傳　醉

ウ
東楼へ息も深かる月の気　和
新綿なりぬ妻子に従ふ　仙
むかし語る四つ薦春の芝居や　酔
芳語い山と寄よ御屋寺　和
京門と誰ねて猫と打しかれ　仙
商ひに添く川果され　蝶
浴領よ堂の名おもむのひ　和
芋棲る時雨の菊花　仙

ウ
角なて桑和の薄のとこえて　酔
御説富ふもさてみよしぬ　和
菓子壽ふ筆庵の帝札頭ろき　伍
筆も借くらき子に修まむ　酔
取れる如筆も丸くて不動尊　紅
春気来に借く我母の法界　伍
すりくりの東楼も我背の月　酔
雲も味く吹萩の小借色　紅

ワ

七条の端に畠ぞ枯ゆく　仏

髭もり足のちらつく踊子　酔

諸宗のなまゐ宗派と起りけり　泣

鳥も飛び行けよ竹の上来る翁　和

名録

冬の夜僧して摘さん夜の空　汀仙

十六夜や夕月の空や塩加減　泉岳

佐保姫も春れ山なや年の也　鉄翁

隣る香の柳とつゞや里静来　可貞

竹の子の折てまうし清ゐれ　松宗

おちつくや竹京町とちる一字　湖酔

文月を光れ日本の湖畔亭子
振りあるく

樵桐の葉ひらりそれやしてよ　ゑ乃の林

八

金毘羅に詣でられ折しも汀仙亭からく
相別るゝ僧も菓子を贈られしに
僧らと別れ侍りて

山寺のひつけや露に松の巣

きのふ文月の二日より皆はらと出く
金毘羅に詣らんにの家三里ばかり
山を象頭の形に似たれば坊舎層くとして
石欄を登ること五十町許おいて松の木を
相仰て拝すうるに額ひらき香炉ありて今
まことにしたき漂泊の身の何くとも
思ひの旅の百千日とあらまほしかれ

松も月にちやさき神の縁なれ

汀仙亭より豆腐の折りて綾川の磯より出
松頭子来る館地は常泉の咽して鏡の如
綾川ゑやさぶに不くてせうやからく いへ
あかつきに立ちもかへそそきのなすあれて流の
かく立寄れ侍らむしてきおし文月六日
里のたうりにてよう綾の二三川の流ていと
なつかしくば頼とまりて此ほのちゝまいまし
なかなれぬる—

綾川や里も六日の月すゞし

高瀬の細石子も田原子風雅を楽しむ
おのくわたりし　文月六日此亭をとふ清様
徒らに竹をの川きいと涼しくこそ
かく青きも声のおもて似されく

千鳥は川音のちるなや星むかへ

名残

月かしこひるあり萩の　ゆりなか　砂乙
泥を流く帷にぬるくなるかな　作氣

文月七日観音ちまいつく清ちのちよま
やくりゆれ行脚の川えて観音
たちつきれるもひとゆりきまに此あたりし
にあつて青よりお部屋の中に入られも　の
旅宿のうれしさありて　今宵　も
ことに晴くくりまされ　星合のそらと
おもひやりて此

宵涼しく新をむきん　天の川

京の一句みちむし宗鑑法師も
西鶴なども終しかくのあまりし至
百花坊なりき山の翠微にあそびて
浮雀橋なりし以うの茶にめ木の橋と
かけてきあれしもいかしさも風雅を
此庵にのこしけりといふむ

小男鹿も庵は萩に萩に一句有

短斎行

百花

移りゆく月も眠るか女郎花　里紅

尋もよ所の笠に下野し　正甫

荒脚も浦の宿紙の月見て　蓮雀

玉味噌の名もきまり多く　祖竹

あらしの中にむしのかけ云　春柱

雑に男の娘の痩瘦ぬ　素吹

立間に京へ行の男とも　文川

おも知られく咲き雪版

降くや篝火の中の音 紅

城下に三里市の山から 花

むかりの子とかに古川新人 荏

受付て帯も雨き日 甫

二

雑の駒のとろすてたびら 松

見しとる衣のさとて古傳に 卜

山うけて十八石の墓 桜寺 川

そこの東にあれて 小風 吹

元服してしやかり衣紅 花

娼家ひとは橋かかるや 紅

野ゝ家と芭蕉に月も家笠 甫

道塔の松に別せす白 荏

我衣しく派樹の衣和歯紅 舟

余所の飛らりこらの子宝 素

物干に酒食もひの吹かり 吹

独猿の素隔童の恵者 川

名録

馬の背にこぼれあふやうらさくら　百花

衣紋るも名なきのねむや寒椿　正甫

藻のむやあたゝかなるともいはず　文川

一もとて白しや梅のかたえ越　冬松

衣掲て今にさきされ柳かれ　蓮在

山晴て青のそら白しおぼろおて　祖竹

もの醉さま野路笠との夕暮　松吹

秋蝶のもつれあふやるの端　如交

名月や松にかゝる柳の音　丁甸

文月中頃鋼青ものくくにいざなはれ
太郎亭の何某桐夫亭に移れ

旅続になれしまんにも添りけり

むかし宗師の川柳にも桐夫子の大家と
称しく庭前のむ蕃を本解の瑶所に
称しし俳名のむかりも杜子に　のこして

我も推敲の一句に馴染となりたらば
庭の風興いひもさんも外川に風雅の
不信なれバ清に下り来て筆を染る
也あらし

やり水や山吹垣をかこひ出

名録

菜も木もうこかぬ昼や蝶の夢　桐夫

口紅の天人かりし墨の色　文可

乳母の膝に菖蒲刀やきよの晴　雲水

牛の子れをうれくわる野路かな　捨石

取りて井戸のくまりや桐の花　花青

余のまれ店や菖蒲の田子　梅月

稲妻に指を岩をと哉　寿本

伴隠

伊勢の川ゝにある致景亭と云ね侍れは
主あるしてあるしよ句をとこそく薬籠は
此国の名産なれはと聞よあるまゝに
涼しさやまつられよかふ濱の林

松讃

致景のめつらしき松はかしめたる君意よあると
唐土に移してより自然に枝葉のさかへて
此時の詠は此亭にかされる松を見て心より
和漢の人もあまたありてありしは
杜甫の富貴を求めしあるは菊むの隠逸と
あまたこそ富貴隠逸ともの人多年ても中
人間の松ひとつなるのしさかへの作詩によあるふ
人も雅俗の物とかりて一生中に松よふくと
上は上も名人も此ゆあらんはるを他門の
詩語にすけるもなしとて己の心の縮り
此に作とかはれたる唐人の言葉によるし
さかふ人を世俗の人和にも評はるへし言語
松の事をあらんを楽ませるといふをむもの
ひは此事あるより部まりてこそやされて
むかし此人も誇りしと私もしる此世よ
ひろうりて志(コブ)常つしくてこそし
古くらす

こゝ関よりうつて絶たらんあらずは此去ら
常盤の名に云伝へしまれ千歳の緑も
其風姿をあらはさんとすれは此ありしも
此松の姿を写し出られて世の人にかくや新く
日向よりそれしむよ一句は吾憧とまき
催しは言語を彩色するになられし松の
禄になるよそへて吾は吉人と諷諌られ
梅移し

錦繍の松もかさりて洪庵の春

餞別

蕉門を俳諧の常とならはれしより
ここに露も踏破せんとまでして
そまでのむかし飛騨しく入りけるも
我はひとしからん郷をゆくかたと
ならく弘めさせまへりし
致尔

芭蕉なりの日脚急へん就法かな

立鳥のあとはふかり松の菊　南浦

芝田の何来風露子ハ田荘ニ志家と
かまへ古宮寺の中ニ風雅の情と
まじはれ人をたゝ一ね此亭ニ
やとりて

青虫の音や桑まくて庵かまへ

さらり天満のうち人能書行る風路
東頭の二子竹箭やとの身の独へて
おくりけるに

跡をむかしよ八朔の節とふれ

天満の風雅子と我師行脚のむし
お別るゝ人なれやかの清陰みて都ね
行るよなかうもあれ楽ふよとく
あそうけれ故よいきあかれけるよ見よ
此下の高き山陰しなり水よ海をとりまて
おち小松志さり隣さる人家ハ百岁と
ゐるゝてきいへ旅懐の実情と得たり
といふも

吾誠よ陰もてくやも本情

餞別

似新

ゆく春や松の詞の音と咲
む跡よあとひ行ね餞く　つる

去月廿日了滴のもとより錦竹画の
かけ物幷京よ帰り侍るにこえ給ひ
みの為もいと珍らしく

おもかけしの音なひもしや松の雨

松賦

南陽の人の孫宅は任運に松の下陰を住家して
行人征馬の往来をつかさとり　其の為に
寒山の松ふうれ月の夕は水波に月を浮ふ
東西よ四方に往かりて雪の詠もさまなん
庭前に一株の雲を横くはへれ其下の
なくさめのさまうは洞明に高木をも
うらやまれ哉籾か重を打るなるにもあらて
ただ松よ遊楽と思ひつるならん　汚た
うし世の中の声をつなるよ錦繡の景と
春て松もとかえるもうつて思ひ返しよ

ことは此意を風雅にもうつしありて右将の
まれにとも忘れるな行は此書の一章と
成りてふくり卿の記念かな
　　　　　　　　随もあかし
稀はあそふなるのこゝ侍も松を花

題盆石

版誠給ひしの下されし盆石は士峯の
傍とゝゝ入そらうりありしいさゝか見ねをは
して盆石集と名付て一冊をはくりて

いつかれ詩歌連俳とも朝夕の仲秋の
八日じゅうんにも此亭を見ね給ふは此石の
横をとらへれく様之昨のあとゝを点して
何也なり

まちてまつこよひは松も月の影

寺田より文通

此ほの月てゝ此川方うと侍るを
いまこて清領行よの人寄されは

此の我まかせしまゝやけふるれ
しかして今治の方に出かけし旅人
の鳴しは終に海の月てらす
あまり浪東八日市に出船して
許るに何分の所から大行、
見てあら川影遊でゝめ
とも

葉月十六日　風露

了我師

葉月のころ先年田とかて天満のうしへ訪ふを
待あかしたるに風早より今治のころをこし旅て
御かへり風露にまゐりけるあまりに
若き貴のりて旅人を得させあつめぬと経
さりし妻の旅女の御に風雅みて志ありて
いづくのやうにてもいとまいられ冷眼の申すべき
人情けのあつまりねむるよ有明の
影晴まかりて浪の出船の良風を待て
いふや月見館の接拵ちからしかりんと
吏碩のめでし何かきしめておよび山海の
二年にて各々歩み行勝深治の才の

けふはなかれひかる雲のけしきなりつ
今宵の月とかこちはてなる暮色の空に
遊ひて其角の俤を書ならし ちうさい旅の
常となりておもひこしこの日の俤をしのはれ
永以の釘語も言に寄るへきやし

紙子きる旅寝しあれて せふの月

東来亭

山胝のそらりと行に雨に行にけふされて
そうしぬ僧に花日とかくりぬ花むかしの

日頃うれしく吏旅のわしにそふされて
東来のわらに極まる家ある内 着
露子か館より立ちかへりて 田面の そのさま
山畑のまゝしけしもいと晴やかなれは
いさしの眺望に入りて いかなもの夢を
あくさに行りく

いなをやらしも引深の眼れ之

短歌行

華の枝やふりくれ人か神　同鶴
梅もゆるされ峻か山　里紅
鶯もかへるやよふ位牌に月とつて　吏須
京より所ふ菓子よ慈栗　蘇女
ウ
咲く蓮とよせて和尚の任る拙　和
こくしも雲の一叢の手からも律　龍

天狐も林藤の嫐を汀おゐれ　蘇
束行そしつく露か人見　須
言るもやぬ房烏に舞かり　露
重抱代にぬかる冥帳　和
筆管のむもむしの行山家　須
母の顔つく猿不の松露　蘇
冷頼に好草かりして待ちる好　和
傲色の不帯をつふ泉濁り　露

青からの田もてハここに鳥日和　蔗
秋に淋しく須磨の夏物　頌
頂上は世話をやきそろ孝行や　露
一門よりて笋の跡え　和
そろそろと籠ち節に月の数　頌
織絵ミことに虫もせつなき　蔗
御ゑふもあめの子ひとりにそふさて　和
ム川も情く重かりて色　路
むの峠山を東にかんと所　蔗
日もあつく又蘇子に餘る　頌

名流

夕立や人も包まれ田の稲穂　風露
ゆくらの流れ川ぞや紙留　素迪
まてしの花籠に案ずる風　仁露妻 蔗女
錦の子の袖に心残るや梅見晴　吏頌

餞別

素むしの峰章あへましにこ来の
ちきりの末ありしくさや
松虫のあともしたはれ雲の路

風鶴